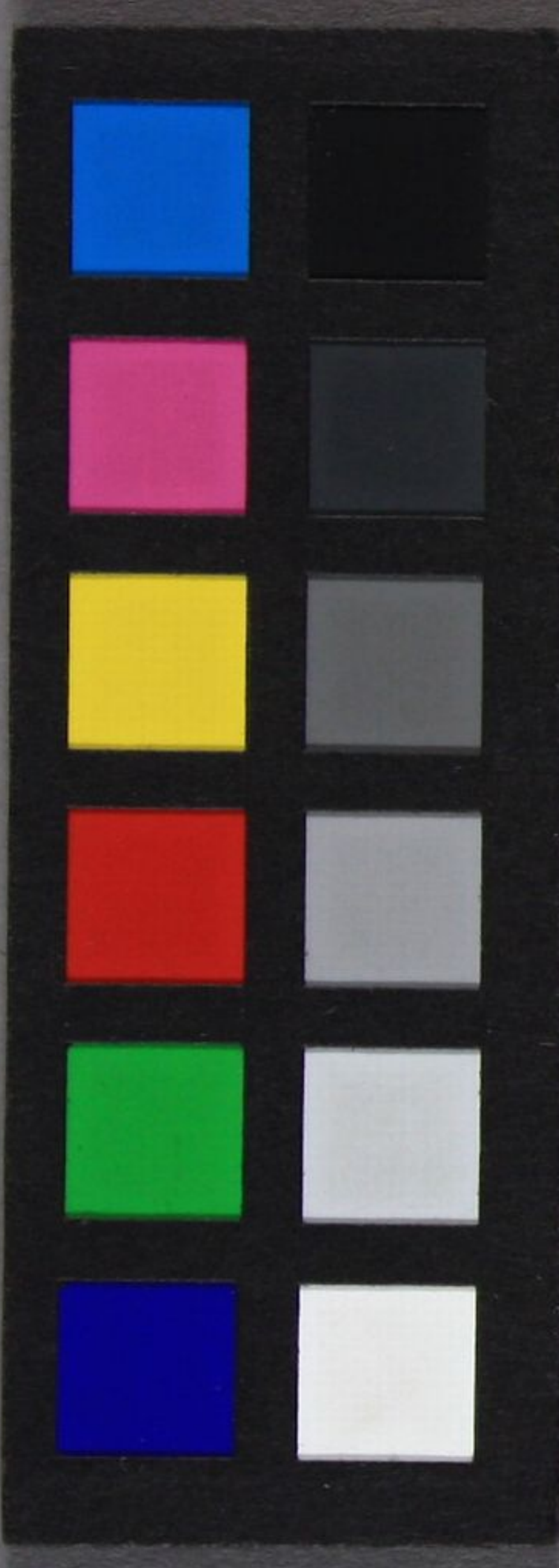


八江雅次郎著

ふり郷集

東京

文學同志會藏版



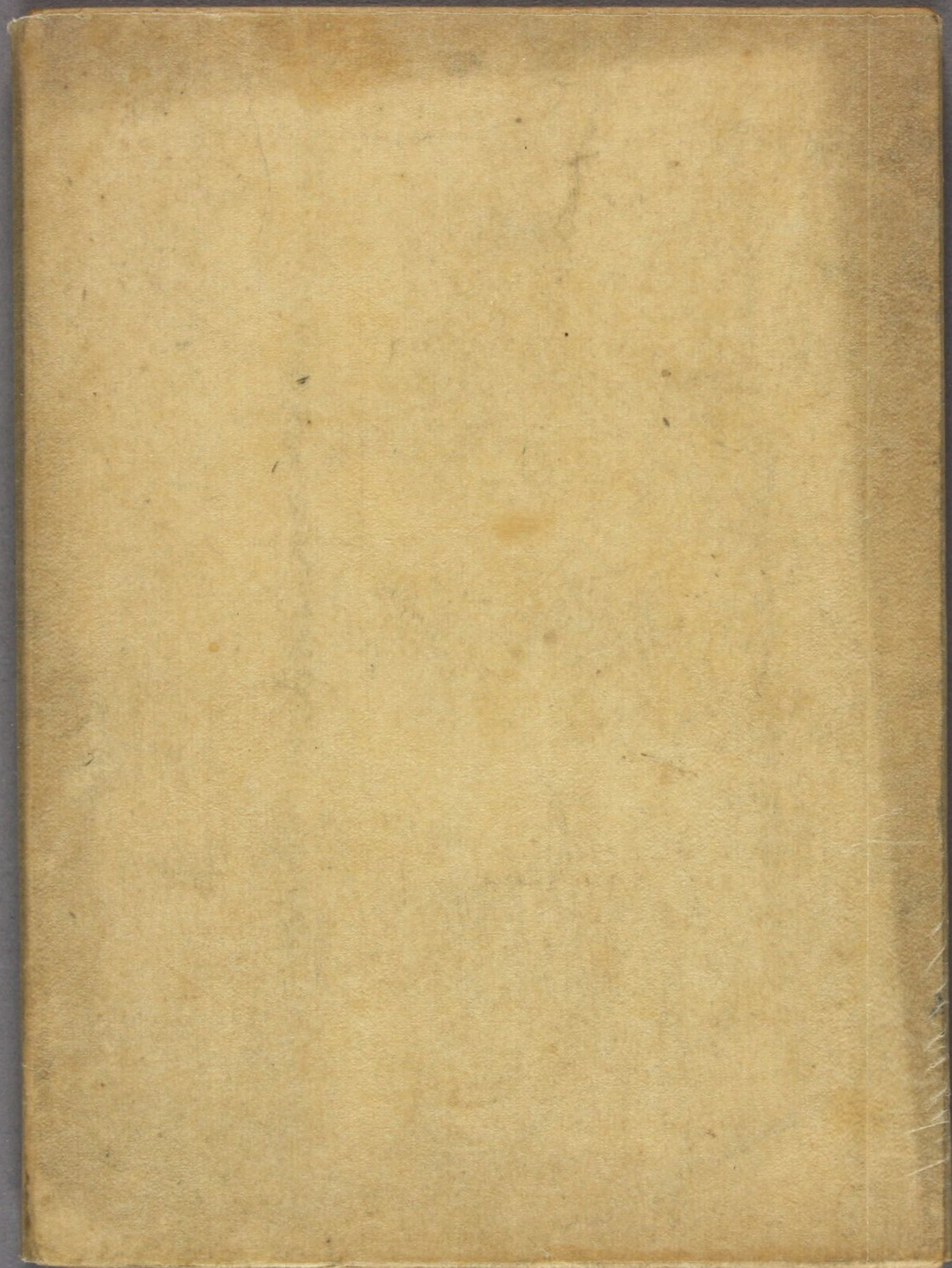
上

乙

鄉

集

文學同志會藏版





山乃人の君にまゐらす

著

者

目次

第二章	第一章	ドラ女(テニソン卿原作)	其二 秋の静肅に	其一 夕榮揺るる	秋韻	名無草	花の音星の聲	磯に佇みて
.....
二八	一七	一七	一四	一三	一三	九	六	一

—Dora said again :
 “Do with me as you will, but
 take the child,
 And bless him for the sake of
 him that’s gone!”

So saying, he took the boy that
 cried aloud
 And struggled hard. The wreath
 of flowers fell
 At Dora’s feet. She bow’d upon
 her hands,
 And the boy’s cry came to her
 from the field,
 More and more distant.—She
 bow’d down
 And wept in secret; and the
 reapers reap’d,
 And the sun fell, and all the land
 was dark.

第三章	三四
第四章	四四
第五章	四八
新婚を祝して	六〇
アルリン公の嬢(トーマスキヤンベル原作)	六四
手を把りて	七三
呪咀の焰(パラダイスロストの一節)	
其一	七八
夢語の卷	
其二	九三
勅使の卷	

其三	一〇三
別居の卷	
孤兒に寄す	一二一
時移らへば	一三八

目次終

ひとこと

ゆくりなく想はぬ空に憧れの夕、
ふと宿りて生れにし此の稚子、未だ
はぐゝみの日數さへ淺きを、故あり
て、あたらし人事こちたき市に旅立た
しめん。とす。げに氣遣はしき極みに
なむ。さはいへ、情け厚き世の人たち
はしも、無下にはさいなみ給ふまじ



ふるる郷集

入江花錦著

磯に佇みて

ほのか映ゆる曙の空
詩の香、齋らす磯の上
妹の手を把り佇めば

かと、ひたすらそれをのみ心頼みに
して……………

あはれいたはしの稚子よ、あどけ
なき笑まひ漏らしえじとも、真心ゆ
溢るゝ涙に涸れて、ひと日も疾く、胸
あたゝかき君が愛のみ手に、安らけ
く憩ひの夢むすびてよ。

生別の朝

花錦生

平和は廣し、春の海。

星の宮殿の舞姫の

眞白の衣の垂るゝにや

おぼろに靄の立ち籠めて

抱けるに似たり、空と海。

妹は漏しぬ頬の笑
余は握りぬ妹の袖。

浮ぶ木葉か、五六艇
靄に漕ぎ入る蚤小舟

影は消えゆき細やかに
響きて聞ゆ、戀の唄。

折から彩る旭の光

白金の弦、黄金の矢

映光美はしく七色の

輝きの領、三千里。

(5)

雌の浪そと寄せ、洞の中
詩と曲たて高く呼ぶ。

妹は謡ひぬ幸の歌
余は吟みぬ愛の曲。



(4)

妹は眺めぬ海の面
余は仰ぎぬ天の彩。

温るき微風たち初めて
松の梢の琴の絃
調や低く奏でつゝ
海面の静肅、ほころびぬ。

雄の浪さと寄せ、岩の上
華と亂れて白く飛び

花の音星の聲

緑えいの絲いとの琴ことに倚より
 快け樂らくの曲うたを奏かなでんの
 希望のぞみは絶たえてよすがなみ
 つらき運さた命めに笑あまひつゝ
 深み山やまに入いりし愛はしの君きみ
 聽きけよ、花はなの音ね、星ほしの聲こゑ。

やさし堇すみれ花はなはいと清きよく

『此この世よを外よそに草くさの廬いは
 ひすびし詩うた人ひとよ わが涙なみだ
 御おん身みの袖そでに掬くみましね
 慰なぐさ藉せきの神かみ泉いづみ、湧わき出いで、
 洒すぎ得うるらん、胸むねの垢あか』。

ゆかし薔しやう薇ういはいと高たかく
 『此この世よを外よそに草くさの廬いは
 ひすびし詩うた人ひとよ。わが薰かをり
 御おん身みの心こゝろに染しめましね

希望の光明、映え出で、
拂ひ得るらん、胸の雲』。

なつかし星はいと強く
『此の世を外に草の廬
むすびし詩人よ、わが装
御身の肌に彫りましね
理想の樂園、浮き出で、
宿し得るらん、神の影』。

——さる君の許に遣はせしふみの中に——

名無草

春あさまだき花の園
紅の薔薇を手柝らんと
彼のも此のものに憧れて
ひたさまよへば、名無草
此の身の顔を眺めつゝ
やをら語りぬ、呟きぬ。

『春の潮に乗りつゝも

ひた慕ひしきに慕ひしける
理想の君ぞ——紅薔薇！』

かさねて言ひぬ名無草
『艶香なけども花無けど
御身がみ胸にまゐらす
同情に熱き吾が涙
せめては掬みませ！刺ぞなき
小さき胸に溢るゝよ。』

胸のうちにはも夏の午
されど面わや冬の色、
寔れ瘦せてぞ在す君
此の身をみ手に摘みましね
しかさまよひて在すより。』

われは應へぬゆくりなく
『名もなく在す草の君
御身を嫌むにあらねども
摘みまゐらせじ、摘み取らし、

秋 韻

其一

夕榮揺るゝ

夕^{ゆふばえゆ}榮^{あき}揺るゝ秋^{あき}の暮^{くれ}
亡^{なき}君^{きみ}か永^{ねむ}眠^むれる瑩^{はか}の許^{もと}
名^な残^{こり}しどろに立^たち出^いでてゝ
歸^{かへ}るや青^{あを}き苔^{こけ}の徑^{みち}。

あまりに切^{せち}の言^{こと}の葉^はに
覺^{おぼ}えず舞^ひと抱^{いだ}きつき
われは接^{キス}吻^フしぬ草^{くさ}の唇^{くち}
斯^かくて心^{こころ}の雲^{くも}はれて
焰^{ほのほ}もとみに静^{しづ}まりて
あはれ癒^いえたり胸^{むね}の傷^{きず}。

——さる君に送りし文のはしに——



傍かたへに立たてる草くさの廬いは
 主人あるじや誰たぞとおとなへば
 應いは、木この葉は堆うづたか
 篋かを漏もる、水みづの音おと。

其二

秋の静肅に

秋あきの静肅しじまに鎖とささるゝ
 水みづ蒼あを黒くろき池いけの畔きし

黙もくして孤身ひとりわが立たてば
 水みづは語かたりぬ、呬さやきぬ。

『手弱たをやめ女めこゝに投身みなげして
 怨恨うらみの波なみの起たちしより
 飛とぶや蛙かはづの音ねも稀まれに
 あゝ寂さびたりな己おのが面おも。

あゝ寂さびたりな己おのが面おも
 それにも勝まさりもの凄すこく

顔色なき君が胸の中
如何なるものか宿りたる。』

されど余なほ黙すれば
そよ風たちて波あれて
薄はさわにをののきて
寂寥いよ、迫り來ぬ。



ドラ女

第壹章

(一)

農夫アランはウイルヤム
ドラの二人と諸共に
賤が伏屋に棲いける
ウイルヤム、渠の養育兒
ドラ女は渠の姪なりき。

アランは常に彼の二人
いとふさはしき對者としも
打ち眺めつゝ胸の中
屢想へらく『渠等をば
樂しき妹脊と結ばなん』。

いでやドラ女は悉く
其の身の叔父の胸の如
同じ想を懷きつゝ
將來かけて窈やかに

ウイルヤルをぞ戀慕ひける。

されどもあはれ若人や
常に彼女と諸共に
同じ家内に棲へる身
縁結ばんのドラ女とも
想はざりけり、ウイリヤム。

(二)

ある日の事よ、ウイリヤム

招きてアラン語らひき
『吾が見よ、此の身は年晩く
娶りしかども死なん前
孫抱かんを願ふ哉。』

されば、此身は爾が婚姻に
心を常に止めしよ、
いでやドラをば視守りね
彼女はいと艶しき
齡に似げなくつゝましよ。

彼女が己が弟の娘
曾てはしなく弟と吾
論争ひ別れつ。外つ國に
渠死しければそが爲に
餘育みたりし、その娘ドラ。

爾が妻と彼女をば
娶りねウイルヤム、此身こそ
此の年頃の晝に夜に
しかく妹脊になさましと

願ふ心の深ければ。

されど、否めるウイルヤム

いとぞ言の葉短くも

應答をなしぬ『吾が身には

ドラをば娶り能はずよ

誓ひてドラを娶らじ』と。

翁は怒り、固拳

握りて言へらく『娶らじと』

汝！さは敢て答ふとは！
免まれ、此の身の若き頃
父の語は法命なりき。

今はた吾も然るべきぞ！

そをし想へや、省みよ、

あゝウイルヤム、一月を

想ひ慮らし、吾が胸に

叶ふ答を聴かせねよ。

否^{あら}ずば、いざや、己^{おの}が身^みを
造^{つく}りましたる神^{かみ}により
宣^{まを}告^しさん、速^{すみ}かに
何^い處^くへなりと立^たちて往^ゆけ
再^{また}び吾^わが家^やを訪^{おも}ひぞ』。

さはれ、ウイルヤム狂^{くる}はしう
答^{こた}をなしつ。唇^{くちびる}を
噛^かみしめ、その場^ばを立^たち去^さりぬ、
渠^{かれ}はドラ女^{ぢよ}を見^みることの

多^{おほ}きにいよいよ厭^{いと}ひける。

さればしむけの無^{つれ}情^{なき}を
ドラは忍^{しの}びつ温^{しと}和^{やか}に、
その月^{つき}果^はてぬ前^{まへ}なりき
ウイヤム、父^{ちち}の家^{いへ}を去^さり
なりぬ、野^の働^{ゆき}の日^{やと}雇^はれ
人^{ひと}と。

應^{やが}て、半^{なか}ばは戀^{こひ}の爲^{ため}
半^{なか}ばや父^{ちち}への意^い氣^き地^ぢにて

働勞者の娘なる

メーリーモリソン語らひて
竟に婚姻を結びけり。

(三)

折から祝の鐘の音

楽しく響きて聞ゆ時

アランは姪を呼び寄せて

語り聽かせぬ「處女子よ

此の身は和女を愛くしむ。

さはあれ、若しや此の叔父の

子なりし渠と語らはじ

はた尙ほ渠が妻と呼ぶ

女子と言葉を交しなば

此の家和女のものならず。

吾が言、法命よ』と。さてドラや

溫和なれば誓ひたり、

彼女竊かに想へらく

『有り得べきかは！叔父君の

み心やがて變るらん』。

第貳章

(一)

何時しか幾何の日は過ぎて
ウイルヤムにしも男の愛見
産れ出でしがさる程に
いたく苦しの災禍は
あはれ落ち來ぬ、渠の上。

日毎に氣落れ父の門
よぎれど父や救せず、
ドラは儉約しく省き得し
些少の貯、秘めやかに
夫婦の許に送りけり。

誰が送れるか、彼の夫婦
知らざる程にウイルヤム
熱病しくなりてあゝ竟に
收獲時よ、はかなくも

永劫の眠に落ちにける。

(二)

折からドラ女、メーリーの
許をば訪ひつ、メーリーは
坐ながら、眼涙ぐみ
己が幼児眺めつ、
想ひぬ、ドラを悪しざまに。

ドラ女到りて言ひけらく

「今日まで妾は叔父君の
仰せに従ひ居たりしが
想ひ出づれば此の身こそ
浅まし的事してけりな。

爾ウイルヤムの身の上に
儂く起りし禍事の
萌苗や總て、愚かなる
あはれ妾の身によりて
生れ出でにし事なれば。

然こそ有らめどメーリーよ
逝きにし彼の君、はた御身
彼の君擇びし女子の爲
此の孤兒の爲にとて
妾は御身を訪ひ侍る。

此の五年の程にして
爾くいたくも豊かなる
成熟の歳やなほ會て
無かりし事を御身とく

然こそは知りておはすらめ。

されば、此の身に幼兒を
伴れて住かせね、許容えば
妾は渠を叔父君の
見まさん處に置きてんよ
小麥や生ふる圃の中。

叔父君、豊かの收穫を
悦び眺めておはす時

ふとその幼児見給ひて
現世を去りし渠の爲
慈愛しますらん様にこそ。』

第三章

(一)

ドラは幼児件れ立ちて
小麦の圃を過りゆき
辿り到りて坐を占めぬ
種を蒔かずて罌粟あまた

繁り生ひたる丘の上。

遙か離りて彼の農翁
歩み入り來つ、圃の中、
されど認ざりき、下男等の
誰しもドラが幼児を
卒て待つ由を告げざれば。

ドラ立ち上り叔父の邊に
往かんとせしが躊躇ひつ、

近^{あた}邊^りに生^おふる百^も草^{くさ}の
 花^{はな}もて小^この花^か圈^{きん}の環^わ
 自^じ身^み造^{つく}り、幼^お兒^{なご}の
 帽^{ぼう}子^しに纏^{まと}ひぬ、叔^た父^ち君^{きみ}の
 眼^{まなこ}に愛^あしく見^みえなんと。
 斯^かくてよ、圃^ぼに彼^かの農^お翁^{きな}
 迎^{むか}ひ入り來^きし折^をかからに
 あはれドラ女^{ぢよ}を認^みめしが
 稼^{かせ}ぎいそしむ下^{しも}男^べ等^らを

荊^{かり}收^い者^{れびと}は麥^{むぎ}荊^かりつ、
 懸^{やが}て夕^ゆ日^ひや沈^{しづ}みゆき
 昏^{やみ}は蔽^{おほ}ひぬ、四^よ面^もの陸^く
 (二)
 されとドラ女^{ぢよ}はその朝^{あした}
 環^めり來^{きた}れる折^をかからに
 そと起^おき出^いて、幼^お兒^{なご}を
 抱^{いた}き、迎^{むか}ひ、坐^まを占^しめき
 再^{また}び彼^あ方^{なた}の丘^かの上^{うへ}。

離り來りて言ひけらく。

『昨日何處に居たりしぞ？
そは誰が見なる？何事を
和女なせるや？しか爰に』
ドラ女一きわ俯向きて
いとも靜かに答へける。

『此はウイルヤムの幼兒！』と
アラン言へらく『さて此の身

禁めざりしや、然る事を
禁めざりしや、和女ドラ』
彼女再び言ひけらく。

『妾が身のみは如何にとも
いざみ心の自由に社——
さはれ、此の兒を伴れまして
現世を去りし渠の爲
あゝ慈愛しみ給へかし！』。

聽てアランは言ひ出てぬ
『吾こそ疾くも解りつれ
此等は、和女と彼處なる
女子が共に、淺簿に
企みたりし陰謀なるを。』

此の身や己が爲すべきを
知らぬことやは、如何て爾
和女の口を俟つべきぞ！
既に和女こそ知り居らめ

吾が言の葉の法命なるを。

尙ほ斯くそをば輕しめし、
然はなせ——吾はその童
伴れ往くべければ——されどらむ
和女は疾くも歸り去れ
もはや必ず吾を見ぞ。』

言ひつゝ、渠は、聲高く
叫びていたく悶くなる

童を携へ伴れ去りつ、
花もて造りし花園の環
散りぬ、ドラ女の足の許。

處女はその身の手の上に
打ち伏せたりき、己が顔、
折しも童の哭聲や
圃の彼方ゆ聞えける
漸次に遠く隔りつゝ。

ドラ女はやをら垂低れつ、
その身初めて來し頃の
彼の事情を思ひ出で
あるは、過ぎにし種々の
事ども浮べぬ、胸の中。

彼女打ち伏し秘やかに
暫時泣きけり、さる程に
刈者は麥刈りつ
懸て夕日や波みゆき

昏は蔽ひぬ、四面の陸。

第四章

(一)

ドラ、メーリーの許にゆき
立ちぬ、その家の門の下
メーリーわか見のドラの手に
有らぬを認め、寡婦の身
助けし神を讃美へたり。

ドラ言ひけらく『叔父君は
幼児伴れて往ましつ、
さはれ、メーリー！妾をば
み許に置きて稼がせね
叔父君言ひき、妾を見じと』。
時に、女女子の答ふらく
『あはれ然ること夢にだに
なし得べきやは、自身
災難ごとを御身の上』

負せまゐらせん憂き事を。

今しも妾は想ふなる
翁に妾兒を委ね得じ
幼兒自然と無情を
見習ふならん、母をさへ
忘るゝ如くなるめれば。

いてや御身と共に往き
妾は妾兒を受け復し

渠を伴ひ歸り來ん
なほも翁に願はなん
御身を元に復しねと。

さるを翁の拒みなば
時よ、爾と妾と一家にて
棲ひ、ウイルヤム残したる
兒の爲め稼がん、渠生ひて
妾等を助くる歳までは。

童わらべ、かよわく伸のびあがり
 アランの時計とけいゆ垂たれ懸かり
 爐ろの火ひに燦きらめく金印きんいんを
 ねかたたりき、いとこも邪氣あどけなう
 片言かたごとまじりの聲音こゝろにて。

童わらべ引ひき入いれ手てを叩たたちつ
 頬ほを叩たたきつ、舉動ふるまひや
 恰あたも愛兒まなごを愛うしむ
 情なさけけ厚あつき人ひとの如ごと。

第五章

(一)
 二人ふたりの女子をみなは接吻くちづけし
 伴つれ立たち到いたりつ賤しんづ家やに、
 鑿かはづせる扉との隙ひまゆ
 闕か窺いみ認みめぬ、彼かの童わらべ
 抱たけるを、祖父おぢが膝ひざの間あひ。
 翁おきなは己おのが腋わきの下した

(二)

女子等入りつ。有繫に

童は、母を見たる時

泣きぬ、み許に往かなんと、

アラン童を置きければ

メーリーやをら言ひけらく。

「あゝ、舅君よ——爾よふを

許容し給はゞ——妾は未だ

妾が爲、或るはウイルヤム

將た此の童の爲にとて

來らざりしよ、依頼事に。

さはれ、ドラ女の爲にとて

今しも來つる、大人の姪

元に復して給はりね

姪君こそは大人の身を

愛でまゐらせるや切なるよ。

あゝ大人！妾が夫ウイルヤム
 逝きにし時や怨みなく
 和ぎ死にし臨終時
 此の身が静かに問ひけるに
 あはれ彼の君言ひけるよ。

妾を爾く娶りしを
 夢だに悔ゆる能はずと—
 妾は能くも堪忍びたる
 貞實に仕へし妻ぞとぞ—

さは云へ大人よ、渠言ひし。

斯く父上を苦しむる
 悪しなど、更に言ひけらく
 『神よ、父をば幸まひね！
 父や知らざれ！吾が經たる
 憂はしかりし辛慘を！』

さて妾が夫は、渠の顔
 そむけつ、竟に死りき—

あはれ幸さちなわらはの妾めかけかな！
兎とまれ、今いまはもあゝ大人うしよ
妾わ兒ごを此この身みに賜たまへかし。

大人うしはこの兒こを無情つれなさの
性さがとや養育ばいくみ給たまひなん
竟つひには此この兒こ、亡父なきちちを
憐はかなく輕蔑けいべつみいやしむる
憂うれきごとをこそ見習みならはめ。

將またなほ大人うしの姪めひにます
ドラ女ぢよをあはれ元もとの如ごと
復かへし給たまはり、何なにごと
なべてをあはれ元もとの如ごと
有あらしめましね、あゝ大人うしよ。

(三)

爾しかメーリーりーの言いひけるに
傍たかのドラは面蔽おもひひ
しばし沈黙ちんもくしぬ、室へやの中うち、

やがて翁は突爾に
啜泣にぞ泣き出でてつ。

「あゝ過ちぬ……過ちぬ

此の身や吾子を殺したり

此の身や渠をば殺したり……

さはれ渠をし愛でゐしぞ——

あはれいとしの己が見や。

神よ、み恕し賜はりね！

あゝ此の吾を——己が身ぞ
過ちたりな、過ちぬ
いざ諸共にオ、吾に
接吻なしぬ、吾が見等よ。』

此の時、二人の女子等は

翁の首に絡みつゝ

接吻なしつ、數度

何時しか翁の頑固心は

溶けぬ、總てを悔い出でて。

さはれドラ女や獨身の
生活送りぬ、死する迄。

— テニソン卿原作 —



あゝさる程に愛しむ
念は復りき、百増に、
三時が程や孫をば
抱きて翁は啜泣
ウイルヤムをし偲びつゝ。

(四)
斯くて四人は諸共に
一家に棲ひ、年たちて
メーリー又の配偶迎びつ、

新婚を祝して

(一)
 高き天上の園の中
 匂ふ、金色、濃紫
 紅、緑、白、黄色
 はた藍色の星の華。

それにも優る彩の星

(二)
 廣き下界の圃の中
 薫る、蒲公英、堇花
 卯花、撫子、燕子花
 菊、女郎花、萩の花。

あはれ優しく笑み出でぬ。

それにも優る妙の花
あはれ懐しく咲き出でぬ。

(三)
 縁えにしの風かぜに誘さそはれて
 匂におひ出いづれば玉たかど楼のも
 埴はに生の小を屋やも和やわぎて
 愛はしき胡こ蝶てぞ舞まひて飛とぶ。

あはれ優やさしき星ほしの花はな
 あはれ懐ゆかしき花はなと星ほし。

(四)

しかく彩あやよき星ほしの影かげ
 しかく妙たへなる花はなの姿さま
 仰あやぎまゐらす今日けふの日ひや
 目め出で度事たぎことの極きはみなれ。

祝いははずてやは此この席むしろ
 壽ことほがずてやは此この宴うたけ。

—さる君の許へ—



アルリン公の嬢

山國指して急ぐなる
領主叫びぬ「オ、船子！
急げよ、急げ！此の渡船場
余等を渡さば與へなん
汝に銀貨一ポンド」。

『さて爾暗く逆卷ける

ゴイルの湖を渡らんと

願ふは誰ぞや？」「ヲ、余は
アルヴハ島領主、此なるは
アルリン公の嬢なるぞ。

余等は共に、嬢の父
遣はす追手をあはれ三日
避けしが、若しも谷間に
出遇はゞヒースの叢を
染めて流れん、余が血潮。

追牛の騎士急ぎつゝ、
脊後に寄すよ足の跡
渠等が見なばあゝ嬢の
戀の君や殺されて
誰か慰めん華麗新婦』。

剛雄しき島人應へける

『往かなん、領主よ、漕ぎ出でん

御身の燦く銀貨を

望むにあらねど御身をば

誘ふ女子の爲にこそ。

此の身は誓ひて、華麗しき

鳥、危険に躊躇はぬ

そが如、いかに濤白く

猛り荒ひて寄するとも

御身等渡さん、此の渡船場。

折から暴は突爾に

激しくなりつ、水の精

女子^{をみな}叫^{さけ}びつ『オ、急^{いそ}げ！
 汝^{いまし}急^{いそ}げよ、如何^{いか}ばかり
 暴^{あらし}風^{かぜ}や妾^{めかけ}等を襲^{おそ}ふとも
 向^{むか}はん、空^{そら}の暴^{あらし}の中^{うち}
 怒^{いか}れる父^{ちち}に會^あはんより』。
 小舟^{こぶね}、離^{はな}れつ暴^{あらし}の陸^{くわ}
 小舟^{こぶね}、進^{すす}みつ暴^{あらし}の海^{うみ}
 一時^{とき}によ—あはれ！人間^{ひと}の身^みの
 漕^こぎゆき難^{かた}く手^てにあまる

暴^{あらし}風^{かぜ}は愈^{いよ}よ暴^{あらし}び來^きて
 いやもの凄^{すこ}し、夕^{ゆふ}の姿^{さま}
 時^{とき}しも甲冑^{かちゆう}身に具^ぐせる
 騎^{つばもの}士^し、谷^{たに}間^まを下^{しも}に寄^よせ
 近^{ちか}く響^{ひび}きぬ、馬^{うま}蹄^{ひづめ}の音^ね。
 叫^さけび高^{たか}鳴^なり、天^{そら}の闇^{やみ}
 仰^{あや}げる二^{ふたり}人^りや語^{かた}りつゝ、
 愁^{うれひ}の色^{いろ}を現^{あら}はしぬ。

暴風襲ひぬ、舟の上。

されど渠等は速く

漲ぎる水の凄まじき

吼聲の中に漕ぎ出でつ。

アルリン致命の岸に達さ

憤怒は移りぬ悲哀と。

渠は怖き暴と闇

透して沖に己が娘を

認めぬ、愛しき片手にて
戀の君を抱きしめ
片手を揚げて救ひ乞ふ。

アルリン悲しみ叫びけり

「歸り來れや！歸り來ね！

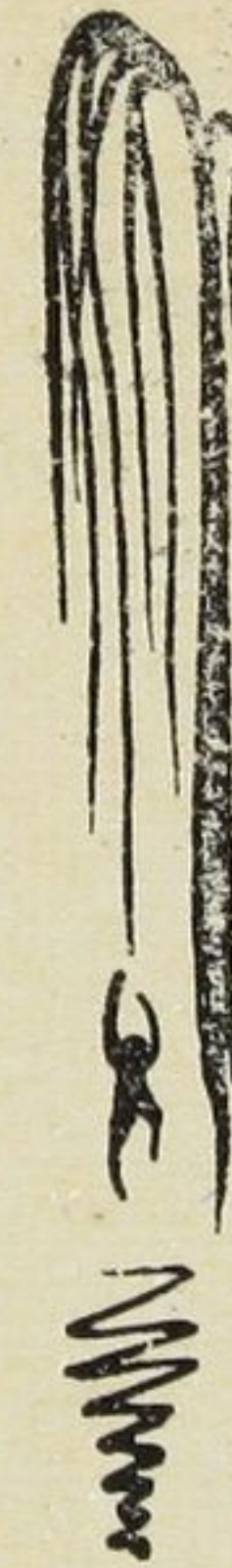
暴の流を横ざりて、

山國の領主許さなん

あはれ余が娘よ、余が娘！』。

そは無益なりし、聲高き
 巨濤どうと岸を擲ち
 歸還あたはず、往きもえず
 見る見る舟は覆へり
 公は残りぬ、嘆きつゝ。

—トーマス、キヤンベル原作—



手を把りて

天崖つらなる山の峽
 静肅に微笑む文學の華
 同じ目的に手折りたる
 三年は過ぎぬ、卒業期。
 靈しき光明、懐しの香
 研究の坂に仰ぎつゝ、
 共に手を把りいそしみて

折りしや同じ幹の華。

余が學友！

調べよ、いざ共に
親睦の詩、別離の曲。

天美や榮ゆる春と夏
神秘や洩る、秋と冬
同じ山路に辿りたる
三年は過ぎぬ、卒業期。

共に手折りて集めたる
蕾ながらの枝の束
文學界の野邊に出て立ちて
翳すや近し、學才の華。

余が學友！

奏てよ、いざ共に
理想の詩、別離の曲。

世界に深し文學の華

世界に遠し學才の極
將來に險し絶壁の岸
將來に暴し大洋の波。

余等は若き武者よ
今しも勇める馬の上
榮光の光明に照されて
學才の戦の門出かな。

余が學友！

歌へよ、いざ共に
希望の詩、別離の曲。

——學を終へて學友に別る、さ——



呪咀の焰

其一

夢語の卷

(一)

清き微風をよそよに
緑色美き若葉の上へ
やさしく渡り、ささ川
ささ浪ゆかしき朝の曲

静かに調ぶる頃よ。

アダム覺めてそれとなく
尙も眠れるイブの方
かへりみれば常ならぬ
憂雲纏へり、彼女の顔
譬へば春の曙の花
霞かゝれる薔薇の花。

アダム静かに手をかけて

あはれ懐しき顔の笑
 再び見ること嬉しけれ。
 想ひ浮ぶるそれだにも
 心根亂れ、毛やよだつ
 あな恐ろしき昨夜の夢
 誰が聲音とわかねども
 妾が耳の邊いと近く
 叫き出づる聲聴けば。

揺すり起せば彼女いたく
 物に怖ぢたる憂き姿
 やをら涼しき眼を開き
 かよわき胸を撫りつゝ
 聴て語りぬ昨夜の夢。
 『妾が生命の脊の君よ
 いと思はしき夜の影
 失せて跡なく今日爰に
 常に變らぬ妾が君の

「無情のイブよ起き出でね
 月や静かに星笑まひ
 風は涼しく空清く
 夕の光景の靈しき哉
 ナイチンゲールの妙の曲
 聴くものなくば榮光ぞなき。」

緑の柳葉よ、眉の姿
 紅の薔薇よ、頬の艶
 さて美はしき汝が姿

垣間みなんと終夜
 えもまどろまぬ星の眼
 あはれと想はゞ起き出でよ。」

聲や正しく脊の君の
 實に懐しきそれと社
 妾は急ぎ起き立ちて
 亂るゝ胸を抱きつゝ
 心も空にゆくりなく
 御身の行方を追ひまつり。

智恵ちゑの木蔭こかげに迎むかへば
 晝ひるには優まさる花はなの色いろ
 香かをりやいとと薫かぐしく。
 いぶかりつゝぞ眺ながむれば
 傍かたへに佇たぐむ影かげ一人ひとり
 姿さまあてやかの天人あまびとよ。

同おなじ梢こずえを仰あぎつゝ

「あな美うるはしの智ち慧ゑの樹きよ
 枝えだもたわゝに實みのれども

いましは神かみに、人々ひとびとに
 他見よそめとならば何時いつしかも
 重荷おもひの肩かたを休やすめえん。

智ち慧ゑはしかくも陋いやしきか
 否あらず、人ひとには授さづけじの
 御意ごいか、さらば何なにどもかく
 此處こゝには植うえておはすなる？
 「天あめ」の禁制とがめの不可いぶ思議かしや
 いで、汝なが肩かたを休やすえん」と。

大胆こころづよくも臂ひぢの伸のべて
 禁制とがめの實みをば怖おそぢずとり
 喰はみては舌したを打うち鳴ならし
 「あなや尊たよとと智慧ちゑの實みよ
 枝えだにて見みしゆいや遙ほろか
 口くちには甘あまさ味あぢはひや。

人ひとをも神かみにすといへば
 實けに彼かの「天あめ」の禁制みとがめも
 然さることながら如何いかばかり

神かみのその數かず増まさばとて
 全ぜん能のうのみ光ひかり何など減へらん
 御心みこころ狭せまきことなりや。

いざや、織たなばた女星ひめの如ごと
 いと華車あてやかのイブ姫ひめよ
 御身おんみも美味くはしみあぢはひて
 入りね、榮光はえよき女神かみの簇むれ、
 狭せまき地球ちきゆうの檻をりい出でて、
 心こころの自由まよに天翔あめがけり。

星の世界の華の園
薫に酔ひて逍遙へしと
妾が口に美味を
投げ入れたりしその後
夢路に迷ふ心地して
彼の天人に連れられつ。

舞ひて昇るは雲の空
遙かに腑るは山と川
自ら此の身の飛行の

あまりの疾に驚きて
ふと足許を見し間に
手引の神は消え失せき。

呼べど叫べど應答なく
あはや落ち來し地の上
尙も覺めていぶかしく
夢の浮き橋迎る時
清くやさしくなつかしく
妾か耳に君の聲。

(11)

聴くも思はし夢語

アダムも痛く驚きつ、

さはれ正なき怪の夢

心に染むる想い社

女々しの鳥濟よあろかしと

やうく氣とり直し。

悲しく、涙さしぐめる

イブを慰めつ、勵ましつ

旭映え美き野に出で、

朝の祈禱聲高く

しばしみ空を仰ぎつ、

祈りぬ「天」の庇靈を。

胸の憂き雲晴るゝ時

名も高砂の浦風に

千歳の松の落葉かく

年尚ほ若き尉と姥

それにも似たるアダム、イブ

(一)
 み空そらの遠をち地ちゆアダム、イブ
 いそしみかせ労働あつける光景ありさまを
 御覽ごらんじおはし、大神おほかみは
 物ものに馴なれたる老ろう天使てんし
 ラツファエルよを呼よび出いたし
 いと懇篤ねもごろの大神言おほみこと。

其二 勅使の卷

たの
樂たのしき朝あしたの仕わ事ざものす。



「汝等も亦聞きたりし
疎ましき昨夜の物音や
曩に奈落を脱け出でし
魔魁セイタン爲ニッ仕業
まがひも非ず、渠が計
言ふだに恐ろし計の底。

汝下界に疾く降りて
彼の樂園の花の門
訪ひて日半の閑話に

夫れとしもなく夢魔等の
近づく由を告げ置き
不覺なきやう計らへよ。

(一一)
天意を奉ぜる老天使
羽袖や輕き秘め飛よ
七寶まばゆき天の門
瞬く程にすぎ往きて
五彩燦く星の世界も

何時いつしか後あとに翔かけ出いでてつ。

樂園らくゑんの角かど、大門たいもんの
傍かたへに峙そばつ窟がけの上うへ
暫時しばしを憩いこひ、天あまつ神かみ
詔みことを詩うた宜ちせる大法み法つ使かに
捧たす嚴いしき敬うや禮まひを
受うけて進すすみつ、案内あんないなく。

獨ひとりしづく緑みどりなす

若葉わかばの森もりの周圍めぐりをば
環めぐりくして美うるはしき
花はなの林はやしの此處こゝかしこ
踏ふみ分わけ着つきぬ、玉たまの露つゆ
いたくも深ふかき花はなの門かど。

(三三)
樂たのしき朝あしたの仕事わざ終をへて
露つゆの軒端のきばに涼すずむなる
アダム、木この間まの蔭かげより

大御使の影仰視ぎ
晝餉の支度いそしめる
イブをば近く呼び寄せつ。

榮光よき珍客迎へんと
互に窃かに謀し合ひ
うなづき合ひつゝ、妹は背戸
手やいそがはしく木實取、
脊は門の邊に出で立ちて
言うやくしく出で迎へ。

(四)

静、ラツファエル大天使
薔薇の花の床の上
据へたる青き芝机
向ひて苔の椅子に倚り
今しも二人がまゐらす
自然の美酒、佳き肴
さこし召されて舌打ちし
すがくしげに、心地よげ
笑ひ興ずる聲高く、

或^{ある}ひは低^{ひく}く、何時^{いつ}しかも
人倫^{ひとのみち}より語り出^いて
天^{あめ}の眞道^{まみち}に及^{およ}ぼしつ。

天^{あめ}の眞道^{まみち}に背^{そむ}きはて
人倫^{じんりん}の敵^{あたい}となりたりし
大天使^{たいてんし}王^{おう}、あるはまた
徒黨^{やから}の神^{かみ}の墮落^{おちどれ}ゆ
新^{あたら}しの世界^よを創造^{つくり}る迄^{まで}
説^ときぬ、それ等^らの因^{もと}と果^{すべ}。

しかく語りて、今日^{けふ}の日の^ひ
神寵^{かみめて}あつさ人の胸^{むね}
夫^それさへ明日^{あす}は夢^{ゆめ}くも
いと恐^{おそ}ろしき毒^{どく}の蛇^{へび}
宿^{やど}らんことも分^わかすなど
魔^ま鬼^き近^{ちか}づくを諷^{ふう}し終^をへ。

尙^なほ四方^{よもやま}山の雜談^{ものかたり}、
時^{とき}移^{うつ}らひて、入相^{いりばひ}の
金矢^{きんし}銀矢^{ぎんし}の日の光^{ひかり}

(一)
 天界の上にはユウリエル
 守れる鋭き眼あり、
 下界の邊にはゲブリエル
 磨ける利き劍あり、
 まして今はた警告の
 ラツファエルの言葉あり。

其三 別居の卷

一日の名残惜む如
 下界彩る夕まぐれ
 果しぬ、天の大使命。



魔魁セータン如何ばかり
強き魔力のあらばとて
斯るかためを抜きなんと
願ふ想や譬ふれば
林と繁る、針の山
越さんのそれよ、烏澁の業。

さるを、不敵のセータンは
如何で計畫止めんや
撓まず、飽かず、只管に

最初の念を徹さんと
獨思慮を凝しつゝ
千々にも碎く胸の中。

ゲイブリエルの確守にて
夢く樂園追はれたる
八日の後の夕の空
狭霧の深く立ち込める
朦朧にまぎれて潜りたり
千仞の岩根の清水の中。

斯くて再び窈やかに
靈樹生ひ立つ樹々の蔭
現はれ出て、塵甜むる
今しも毒蛇の躰の内
宿りて姿を穩しつゝ
朝の來るを待ちにける。

(二)

應て朝に、アダム、イブ
妹脊は告天子の歌につれ

起き出て、常の禮拜に
天の庇靈、祈禱して
今日の一日の計營の
評議せんと額寄む。

(三)

「背の君アダムよ、妾等は
手をとりに交はし、連理の枝
清き樹陰に亂れ散る
落葉を拾ひ小草刈るも

實に極りの快樂よ
されと力や限あり。

手傳なさん子孫の
出で來ぬ程に夕となく
晝とも非ずいそしめど
み園や廣く、隅の方
掃ひ淨めん事だにも
覺束なきの仕事なるよ。

何時まで斯くて在らなんの
あれれ御身の意にや、
二人手をとりにればこそ
優しき蝶の羽風にも
さゝやぎあひて想ひなく
移る月日を過すなれ。

貴き光蔭惜みなば
今日より別れて右ひだり
御身は此方の池の面

浮びて翳しね藤の波
此身は彼方の森の中
飾らん薇薔の花の環

(四)

道理ありげに聞ゆれど
イブや婦人よ、智慧浅く
何時しか早も先つ頃
天つ詔を旨のまゝ
ラツファエルが諷したる

注意をも忘れけん。

(五)

「吾妹よ、御身の心がけ
優れることや喜ばし
さはれ、暫時の寸陰も
惜みていそしみ嫁がんは
吾が大神の御意に
違反さまつらん恐あり。」

御身が、共に住居する
變化なきをば倦み初めて
暫時獨居おもひ立ち
をかしき變化の浪の華
平和の中に求めんの
願ひなりせば逆はじ。

さはれ、吾妹よ、聴きましね
只だ心得の胸の中
守るべき哉、先つ頃

大御使の宣ひし
悪魔の上や暫時だも
忘れ得べきの事ならず。

靈しく妙に不思議しき
悪魔の術を用ゐつゝ
吾等を邪道に誘かんとす、
互に別れて住はんは
渠等が爲に無上の
しか好き機会となるならめ。

あはれ吾等の身の周圍
 常に惡魔の毒の影
 夕の靄の蔽ふ如
 微かに繁に纏へるを
 夢路の間の片時も
 心な緩べそ、忘れどよ。』

危険の恐、多かれば
 (六)
 イブの發議消さなんと

思慮や深き脊のアダム
 言葉靜かに語りしも
 一徹勝ちの女の心
 反りてそが爲め激しけん。

『大御使のみ言葉に
 偽りおはす事なくば
 實に妾等の周圍には
 常に惡魔の毒の影
 微かに繁に纏へるや』

疑ひまゐらす術あらじ。

若し左もあらば如何でかも

樂しかるべき妾等の身、

此處樂園や名のみにて

地獄と差別あるまじく

吾が大神の稜威にも

關するならんの道理よ。

假令や如何なる惡魔等の

此の身の周圍纏ひつゝ、

誘惑つよき眼にて

窺はゞとて、妾が心

動かざりせば何憂ひ

はた何事を怖るべき。

會て聞きしよ、誘惑の

試金石の辛き邊に

觸れし朝に非ざれば

いかに自身真心の

強固つよきを自覺さとり侍はべるとも
さこそ誇ほこるに足たらざれと。

萬よろづの物ものの靈おほ長さとしも
生うまれ出いてにし人ひとの身みよ
彼等かれら惡魔あくまの低ひくき聲こゑ
聞ききて直ただちに怖おそれんは
吾わが大神おほかみの大威力たいりきよく
疑うたがひまつるに似にたる哉かな。

斯かくしも固かたく思おもひ詰いる
イブの希望のぞみに逆いさかひて
止とどめ消けさんも愚おろかしく
あまりに女め々めしき術すべなるを
まして彼女かれなほ容易やすは
已おのが意い曲まぐる姿さまもなし。

アダムは暫しばし時まゆ眉ひまの間
不安ふあんの皺しわを寄よせつゝも
彼女かれの言葉ことばに従したがひつゝ、

あゝ時來りぬ、大魔王
大の魔力を逞ましく
打ち揮ふべき時は來ぬ。

—「失樂園」の一節の意をとりて—



孤兒に寄す

可憐なる孤兒
余が同情熱き孤兒
汝は如何でかしかく生れ來し
見るさへ悲しのあゝ孤兒よ。

平和を夢むる暖かさ
母の懷中
父の樂園

知れりや、悲しのあゝ孤見よ。

愛情溢るゝ同胞の笑

汝は何時か見し、

熱情燃ゆる同胞の手に

汝は何時かは抱かれし。

母の乳房に稚子等が

いと安樂く熟睡る夕

露草かたしく牀の中

唯だ孤身、何をか夢む。

母の慈愛の振袖に

手をば引かれて稚子等が

花笑む蔭、鳥謠ふ野に

胡蝶追ふ光景を如何に眺むる。

艶なき蒼き頬

涙ひそめる其の眼

あゝ余が同情の心に

悲哀の使者とぞ。――

紫深き唇に

謠ふ汝が無邪氣の唄

悲哀の韻

……竟に余が耳を破りぬ。

可憐なる孤兒、汝は如何に

何をか樂しみ

何をか望み

嬉しげに戯れ遊ぶ。

母戀しの想

父暮しの念

小さ胸を破りしにや

果た非ずとにや。

汝は悲哀のその中に

苦しく外兒を装ふにや

はた知らざるにや、身の運命

あゝ知らざるべし、知らざるべし。

汝ながうま生まれき來そしひ其ひのひ日ひより
母ははす既に汝が為ために生いきず
父ちまたな汝が為ために在おはさず
同は胸らだらにもな無き孤み兒なよ。

あゝ渠かれをしてみな孤し兒こと

親おややなしたる

社ひ會とやなせる

はた神かみのみさ掟たか。

人ひとの子こなべてかみ神かみのみこ子こ

さるを！さるを！

万ばん能のなるかみ神かみよ

何なぞか孤れ兒れをす救くひたま給はぬ。

譬たとふらばあゝな汝が運さ命め

寄よるへ邊な渚さのと遠はさく

大な洋たのひろ廣ろ面もに

さまよへる若き孤蝶が身。

かよわき翅ひらくと

罪なき胸に

あたたかき希望もて

飛べ！心猛く。

いかばかり美しき波の華

汝をば招くとも心して

少時も息ひど

羽を閉ぢど。

沖の孤島のいたくも聖き

神の樂園に

やさしき微笑漏せる

董の床にしも息へ。

其處には聖く暖かき

慰籍の源泉

希望の光明

汝が爲に溢れたり。

さはいへ、神の樂園
遙かに遠き彼方よと
悲しき誤解ひなせそ
心悩みぞよ。

汝が心靈平安に息ひ
眞道に悟り入る朝
汝が心の中にぞ

神の樂園は現はるゝ。

往け！その神の樂園に

母おはし

父まして

歎樂もて汝を迎へ給ふ。

戯れよ遊べ！

同胞は汝が手を把りて
幸多き野の邊に

聖き流れをば與へん。

やさしき花の笑に

鳥うたふ清き音に

打ち合れて謠へ！叫べー

快樂しき調べを。

其の朝ゆ汝はしも

新しき希望

光をはなち出で、

いかでかは嘆きの胸あらん。

その身の運命な怨みそ

母戀ふ念

父慕ふ胸

疾く捨て、想はざれ。

誰かは汝を孤兒と呼ぶ

心平安く、健かなれ

聖き汝こそ

神のみ恩愛あつさ見。

神は汝に將來を與へぬ！

樂しく心霊を修磨け

眞道に進め

神の御園に疾く遊べよ。

愛あつさ神の授け給ふ

心霊を穢し

將來を見捨て

悲想の中に足踏みなせそ。

注意よ、怠りぞ。

汝が心の中に

神の御園

神のみ國あるを。

外見のみ貴き人の世の

苦痛に泣きぞ

「孤兒」に悲しみぞ

疾とくよろこび歡樂えを得えよ。

萬ばんのよ能なるなるかみ神かみ
惠みめぐみあつつさ神かみ
疾とくみちび導び導び給たまへ
心こころ靈かよわ弱よわさみ孤な兒しと見をを。

慰なぐさめ藉いづみのいづみ源いづみ泉いづみ
希ぞ望みのひかり光ひかり朋かり
溢あふるみ、その樂み園そののその中うちへと

悲かな衰しみのやみ闇やみ路みちにさままよふ孤な兒しと見をを。

神かみはな汝なにゆく將あ來たをあ與たへぬ
樂たのしくこころ心こころ露つゆをあ修あ磨らけ
眞まこと道みちにすす進すすめ
神かみのその樂み園そのにと疾とくあそ遊あそべよ。

(三十六年秋作)



時移らへは

時移らへば現世の
草木よ人の差別なく
降り往くなり老の坂
潜り往くなり墓の門。

さはれ御身の頬の笑
見てもし以來余が胸に
繁り生ひたる戀の草

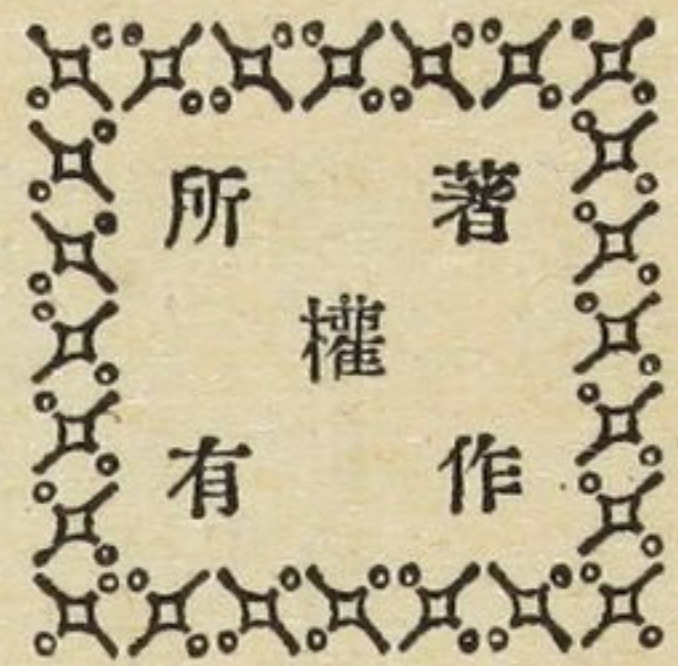
ふる郷集終り

何時かは枯れん枯るべしや。

御身が愛の手に秘むる
懐かしさ鋭鎌に刈られずば、
優しき君が胸の邊に
仰ぐを得ずば、愛の華。

明治三十八年十二月十日印刷
 明治三十八年十二月十三日發行

定價金貳十錢



著作權所有

著者 入江 雅次 郎

發行者 大月 隆

印刷者 青木 弘

印刷所 東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目
 株式會社秀英舍第一工場

東京市神田區錦町一丁目十六番地
 文學同志會

發兌元

大阪市江戶堀上通 文學同志會大阪支部
 廣島市西橫町 文學同志會中國支部

(電話本局千〇九十三番)

文學同志會出版圖書目錄

美 人生の氣力	妙 人生の初旅	人生の老旅	人生の悔悟	人生の片影	人生の目的	人生經濟學
定價二十錢 郵稅四錢	定價二十錢 郵稅四錢	定價二十錢 郵稅四錢	定價二十錢 郵稅四錢	定價二十錢 郵稅四錢	定價廿五錢 郵稅四錢	定價二十錢 郵稅四錢
人生の情事	吾人の生活	山高水長	風月萬象	斷巖絕壁	枕頭の山水	悲哀の快觀
定價二十錢 郵稅四錢	定價廿五錢 郵稅四錢	定價二十錢 郵稅四錢	定價廿五錢 郵稅四錢	定價三十錢 郵稅四錢	定價二十錢 郵稅四錢	定價三十錢 郵稅四錢
萬情萬眉						
定價十六錢 郵稅四錢						

最近國家社會主義

定價六十錢
郵稅八錢

斬奸狀

定價廿五錢
郵稅四錢

精神と力量

定價三十錢
郵稅四錢

虛心談

定價廿五錢
郵稅六錢

活學談

定價二十錢
郵稅四錢

活精神

定價三十錢
郵稅六錢

活禪錄

定價五十錢
郵稅六錢

禪學斷片

定價廿五錢
郵稅四錢

聖僧道元

定價二十錢
郵稅四錢

作文指南

定價廿五錢
郵稅六錢

山水記事論說文

定價三十錢
郵稅六錢

高等記事論說文

定價三十錢
郵稅四錢

偉人の膽力

定價廿五錢
郵稅四錢

偉人の生長時代

定價廿二錢
郵稅四錢

頓才の詩人

定價二十錢
郵稅二錢

深窓の佳人

定價三十錢
郵稅六錢

婦人實務錄

定價二十錢
郵稅四錢

女子講本

定價三十錢
郵稅六錢

日佛教拾二傑傳論

定價三十錢
郵稅四錢

馬琴妙文集

定價二十錢
郵稅四錢

滑稽妙文集

定價三十錢
郵稅六錢

戲曲妙文集

定價三十錢
郵稅四錢

吞氣文集

定價卅五錢
郵稅六錢

高等艷麗文集

定價廿五錢
郵稅四錢

立身の事蹟

定價二十錢
郵稅四錢

研學の順序

定價二十錢
郵稅四錢

青年の將來

定價廿五錢
郵稅四錢

活戀戀

定價三十錢
郵稅四錢

戀と死

定價二十錢
郵稅四錢

墳墓の地

定價卅五錢
郵稅八錢

失策の半生涯

定價三十錢
郵稅六錢

成功秘訣到着

定價廿五錢
郵稅四錢

天籟萬丈

定價二十錢
郵稅四錢

小哲學

定價廿五錢
郵稅四錢

珍本 鴨長明海道記

定價十五錢
郵稅二錢

理想の大臣

定價廿五錢
郵稅四錢

無能の天下	人情の後見	戀愛の精神	理想の政黨	軍隊の側面	成效者の苦學	加賀の千代	哲學要領	禪學の奧義
定價廿五錢 郵稅四錢	定價三十錢 郵稅六錢	定價三十錢 郵稅六錢	定價二十錢 郵稅四錢	定價二十錢 郵稅四錢	定價二十錢 郵稅四錢	定價二十錢 郵稅四錢	定價五十錢 郵稅六錢	定價九十錢 郵稅八錢
弱者の臨終	戀愛の文豪	婦人の情力	自然界的審美	文學の審美	人生の審美	吾家の憲法	社會學と哲學	社會學講義
定價三十錢 郵稅四錢	定價三十錢 郵稅六錢	定價三十錢 郵稅六錢	定價廿五錢 郵稅四錢	定價廿五錢 郵稅四錢	定價廿五錢 郵稅四錢	定價廿五錢 郵稅四錢	定價六十錢 郵稅十錢	定價五十錢 郵稅六錢

英雄の片影	心識活談	詩の神	學生の苦心	心學養性篇	心學道體篇	心學人間篇	心學道義篇	心學迷悟篇
定價二十錢 郵稅四錢	定價廿五錢 郵稅四錢	定價二十錢 郵稅四錢	定價二十錢 郵稅四錢	定價廿四錢 郵稅四錢	定價廿四錢 郵稅四錢	定價廿四錢 郵稅四錢	定價廿四錢 郵稅四錢	定價廿四錢 郵稅四錢
心學性理篇	心學明德篇	心學靈性篇	俳流の女神	箴言	高等秀才文集	奇僧の片影	高等才媛文集	風彩と審美學
定價廿四錢 郵稅四錢	定價廿四錢 郵稅四錢	定價廿四錢 郵稅四錢	定價廿四錢 郵稅四錢	定價三十錢 郵稅四錢	定價廿二錢 郵稅六錢	定價廿五錢 郵稅四錢	定價三十錢 郵稅六錢	定價三十錢 郵稅六錢

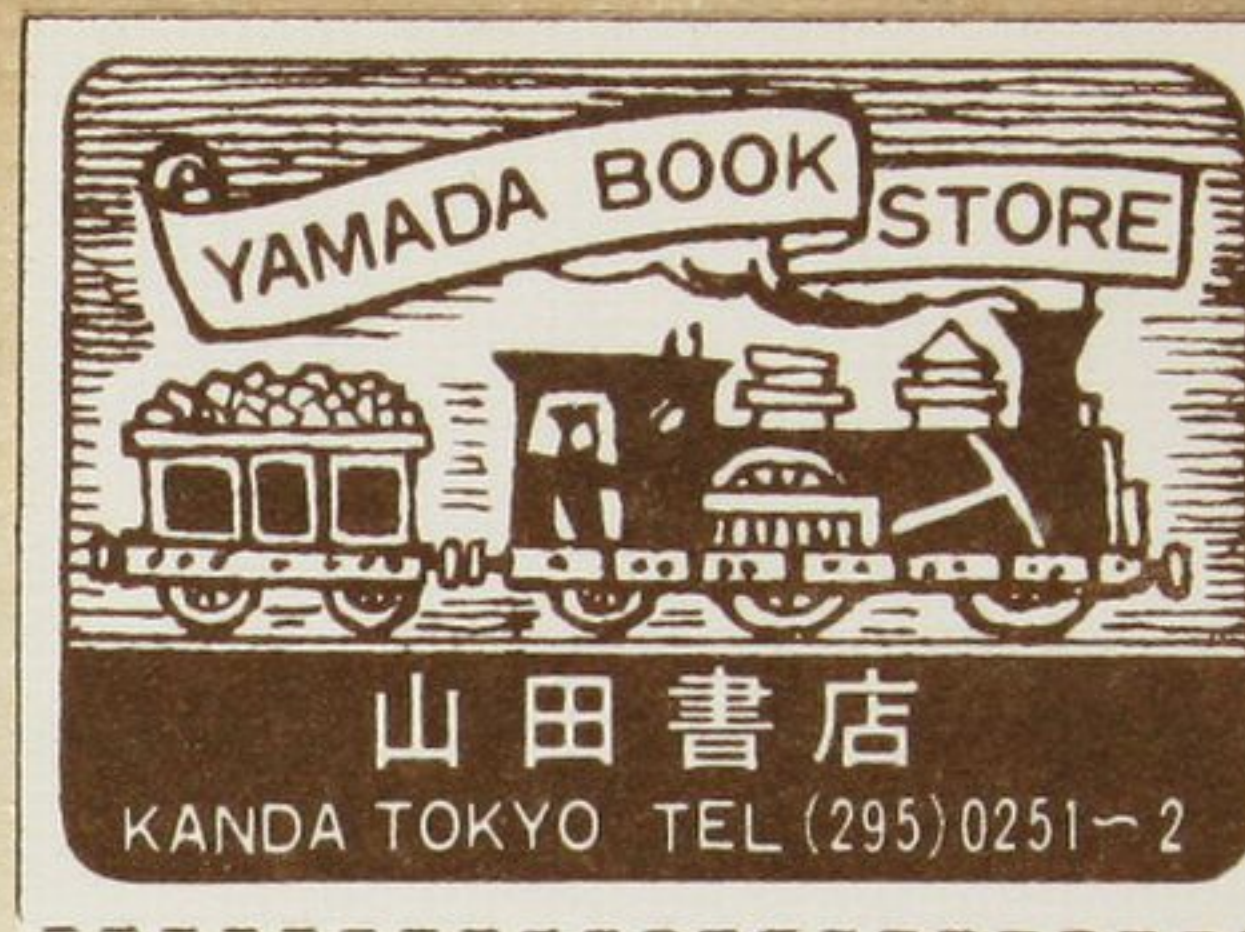
近松妙文集	美文組立法	中等作文組立法	秀才記事論說文	馬琴旅行文集	心琴	女子美文斷片	高等美文斷片	審美學要義
定價廿五錢 郵稅四錢	定價廿五錢 郵稅四錢	定價廿五錢 郵稅四錢	定價三十錢 郵稅六錢	定價三十錢 郵稅六錢	定價二十錢 郵稅四錢	定價廿五錢 郵稅六錢	定價廿四錢 郵稅四錢	定價三十錢 郵稅六錢
軍歌集	軍人と膽力	社會學と事業	社會學問答	名流の家憲	立身冒險談	芭蕉妙文集	爲永妙文集	西鶴妙文集
定價十二錢 郵稅四錢	定價二十錢 郵稅四錢	定價七十五錢 郵稅十錢	定價三十錢 郵稅四錢	定價廿五錢 郵稅四錢	定價廿五錢 郵稅四錢	定價卅五錢 郵稅六錢	定價三十錢 郵稅六錢	發賣禁止

全 三學年用	全 二學年用	中等國語讀本 字引一學年用	全 四學年用	全 三學年用	全 二學年用	小學高等科 字引一學年用	征露詩集	處世の歌
定價廿五錢 郵稅四錢	定價廿四錢 郵稅四錢	定價廿四錢 郵稅四錢	定價十五錢 郵稅四錢	定價二十錢 郵稅二錢	定價二十錢 郵稅二錢	定價二十錢 郵稅二錢	定價十五錢 郵稅四錢	定價三錢五厘 郵稅二錢
人生と山水	忍ぶ草集	百字文集	すみれ集	玉琴集	殘花集	高等美文資料	全 五學年用	全 四學年用
定價二十錢 郵稅四錢	定價二十錢 郵稅四錢	定價廿五錢 郵稅四錢	定價廿五錢 郵稅四錢	定價二十錢 郵稅四錢	定價二十錢 郵稅四錢	定價廿五錢 郵稅六錢	定價三十錢 郵稅六錢	定價三十錢 郵稅六錢

テニソンの詩	琵琶歌妙文集	謠曲妙文集	婦人の美觀	婦人と家庭	婦人の使命	婦人と文學	英雄僧日蓮	新婚旅行
定價六十錢 郵稅八錢	定價廿五錢 郵稅四錢	定價廿五錢 郵稅四錢	定價廿五錢 郵稅四錢	定價廿五錢 郵稅四錢	定價廿五錢 郵稅四錢	定價廿五錢 郵稅四錢	定價三十錢 郵稅四錢	定價五十錢 郵稅六錢

不如歸集	靜思斷片	殘雪集
定價二十錢 郵稅四錢	定價廿五錢 郵稅四錢	定價十二錢 郵稅二錢





山田書店

KANDA TOKYO TEL (295) 0251-2